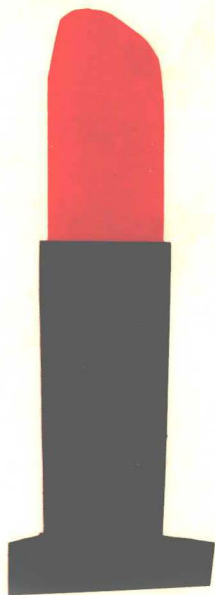


イ ノ セ ン ト

堀田あけみ
AKEMI HOTTA

ガ
ー
ル



河
出
書
房
新
社

I N N O C E N T G I R L

イノセントガール

堀田あけみ

イノセントガール

©一九八八
一九八八年一〇月二十一日 初版印刷
一九八八年一〇月三十一日 初版発行

著者 堀田あけみ

発行者 清水 勝

発行所 河出書房新社

〒150 東京都渋谷区千駄ヶ谷二―132―2
電話 〇三―四〇四―1201 営業
〇三―四〇四―1861 編集
振替 東京〇―10802

印刷 三松堂印刷
製本 小高製本

落丁・乱丁はお取替えいたします
定価は帯・カバーに表示しています

Printed in Japan
ISBN 4-309-00528-4

堀田あけみ（ほった あけみ）

一九六四年、愛知県生まれ。名古屋大学教育学部卒業。現在、名古屋大学大学院に在学中。専攻は教育心理学。

高校二年生のときに書いた『80アイコ十六歳』で昭和五十六年度文藝賞を受賞してデビュー。作品はほかに、『さくら日記』『フェアリーガール』『煙が目にしみる』『転がる石になれ』『SHOUT!』がある。

イノセントガール

装帧
田淵裕
一

(1)

唇を突き出した幼い横顔に、これ以上ないというくらい鮮やかな紅のルージュは、不自然に似合っていた。

ふっくらとした、まだ他愛ないお喋りと、甘いお菓子しか知らないような唇は、その鮮やかな紅を載せる為だけに、存在しているようにさえ見えた。

一度は、うっとりとして見とれた正行だが、すぐにピンと来た。研修前に読んだマニュアル通りの少女。セーラー服姿で一つの売り場を長い間うろついている、大きな紙袋を提^{しかた}げている……。

正行は、自分が立っている電化製品売り場を見わたした。客はいない。鹿田正行は、この春に大学を卒業し、電化製品メーカーに就職した。社内研修を経て、現場研修……実際に自社の製品を売る、という研修の最中である。二カ月にわたるこの研修が終わると、初めて会社での配属が決まり、位置がはつきりする。その研修も、そろそろ終わりに近い。少し前までは、夏に向けてエアコン関係の仕事が忙しかったが、今は一段落ついたところだ。二人いる他の研修生も、暇そうにしている。隣の化粧品売り場の店員は、まだ少女には気付いていないようである。

でしゃばり過ぎかな、と思いつつながら、彼女に声をかけてみる。

「君、その紙袋の中、何が入ってるの？」

少女は、鏡の中の自分を嬉しそうに見つめている。

「関係ないでしょ」

これまたマニュアル通りに、しかし結構愛嬌のある言い方で答えた。とても答えたと言える状況ではないが。少女の目は、鏡の中の自分しか映していなくて。

正行は、むっとした。

「ちょっと見せてもらえるかな」

「やーだよ」

少女は、ちょっと右に、そして左に顔を向ける。視線は相変わらず鏡の中に。

「どうかしましたか？」

やっと化粧品売り場の係が気付いて、近づいて来た。正行は、我ながら莫迦なことに首を突っ込んだもんだと、少々気まずく思いながらも、

「いや、この娘、ずっとこのあたりをうろろしてて、どうも変だから……」

「そうねえ、この子、いつも来るんだわ、ここらへんうろろして」

「中学生が化粧品売り場に来ちゃいけないってきまりは、ないんですもの」

やっと少女は、鏡以外のものを見た。少し顎を上げて、すまし顔で二人の大人を見つめる。

「私、何も悪いことしてないわ」

「じゃあ鞆の中を……」

「どうして？」

「やましいことがなければ、見せられる筈だ」

正行がそう言った途端、少女は胸に荷物を抱えて逃げ出した。

「大人をからかって楽しいか」

少女は、面白そうに笑っているだけで、答えない。

逃げた少女を、二、三步で正行は捕まえた。後は、化粧品売り場の係に任せて、自分は持ち場に
戻るつもりだった。それを、なんだかんだと言いくるめられて、この少女の取り調べを押しつけら
れてしまった。こんな役は、誰もやりたがらないに決まっている。ただでさえやりにくい上に、相
手がシロだったりすると、もうどうしようもない。

だいたい、どうしてこの子が万引をしそうに見えたのか、今となつては、正行にはわからなかつ
た。大きな紙袋を持った中高生には気をつけろ。それは研修用マニュアルにも、大きく赤字で書か
れていた。他にも、このスタイルには要注意、とイラストも添えて、様々なポイントを示してある。

第二中学校 二年B組 大野亜蓮^{あな}

彼女は大きな袋こそ持つてはいたが、よく見ると、靴も靴下も真っ白で、少々短か過ぎるよう
な気がしないでもないスカートから出ている足も健康色だし、髪の毛も、地球の引力に逆らわない、
真直な光るような黒色だ。何が違うと言って……。

その、紅が異様に似合う唇だけが、普通の中学生とは違ふところだ。大人の女でも、こんなに違
和感なく、この色を使える人は少いのではないか。

そんなことは、正行の知ったことではない。重要なのは、結局、彼女の鞆の中からは、彼女の持
ち物しか出てこなかったということだ。

「ごめんなさい」

少女が言った。

「え？」

救われた気持ちで、正行は少女を見た。大人をからかったことを、反省してくれると言うのだろうか。

「ごめんなさい」

少女は繰り返した。

「謝り方を教えてあげたのよ。無実の人間に、万引の疑いかけて、こんな扱いしたんだから、お兄さん、謝らなきゃ駄目でしょ」

「君が逃げたりするで」

「誰だって、あんな扱いされたら逃げなくなるわよ、その場にいたまれなくなってる」

そう言いながら「いたたまれない」とか、「傷ついた」とかいう様子を全く見せていない。そこで正行は攻撃の矛先を変えた。

「だいたい、どうして中学生のくせに、化粧品売り場を毎日うろついたりするだ。他にすることがあるだろう。ろくな大人にならんぞ」

判で押したような説教をする。

「だって、お兄さん、この色、このルージュ、私以上にこの色が似合う女、お兄さん知ってる？」
少女は身を乗り出し、真紅の唇に指をあてた。思わず知らない、と言ってしまうようになるが、やっとな抑えて、

「口紅の色みたい、俺にはわかれせんわ。みんな同じに見える」

「つまらない人」

溜め息をついて、再び椅子に深く腰かけた少女の、あまりに大人びた口ぶりに、正行の動悸は妙に速くなる。

そこらへんのカギが、無理にする背伸びとは、ちょっと違うように感じられる。それを、気のせいだ、気のせいだ、と自分に言い聞かせる。

「お兄さん、もう帰っていい？」

「ああ、いいよ」

二度とこんなことするんじゃないぞ……そんなことを言って送り出せる立場なら、どんなに楽だったことか。一瞬、謝ろうかと思った。謝らなければいけない筈だった。しかし、大人気なくも、癪に障って、癪に障って、そんなことは口が裂けても言いたくないのだ。ただ無言のまま、彼女が出て行ってくれるのを待つのみである。しかし、彼女は出て行こうとはしなかった。

「ふうん、行ってもいいんだ」

そう言って、セーラー服の胸に指先を滑り込ませた。そして鮮紅色に輝いた小さな壘をつまみ出す。

「てめえっ！」

その小壘を取り上げながら、正行は腹立たしさと同時に、安心感を覚えていた。やっぱりこいつ、万引してたな。

「どこまで大人をバカにしたら気が済むんだっ！」

「どこまでも」

「何をっ！ 学校に連絡……」

「おバカさん、よく見なさいよ」

正行は、手に持ったマニキュアの小壺を見た。やはり、これ以上はないというくらい鮮烈な赤だ。万引した品ならば新品である筈なのに、それは半分以上使ってあって、蓋の周りには、固くなった赤いものがこびりついていていた。

（見本か……？）

しきりとひっくり返して見てみるが、見本という文字は無い。見本ならば万引にならない、ということはあるのだろうか。エアコンや冷蔵庫を担当している正行には、今まで万引なんて縁が無いことだったのだ。

「高かったのよ、それ」

少女が手を出したので、正行は小壺をその上に載せた。少女は蓋を取り、楽しそうにマニキュアを爪に塗り始めた。桃色の綺麗な椎爪なのに、人工の赤に塗り込めていく。

「お年玉で買ったのよ」

うっとり爪の色を見ながら言う。彼女の口から「お年玉」などという言葉が出てきたので、正行は驚いた。考えてみればマニキュアや口紅よりは、ずっとその年頃に似つかわしい言葉なのに。彼女にはちっとも似合わない。

「すっごく高いの。そこらへんで売ってる安いのは、やっぱり色が違うし」

「中学生が、どうしてそんなものに大金使うんだ。他に買わなかんものは幾らでもあるだろうが」
「だって、私、自信あるの。この色が世界で一番似合うのは私だって。似合わないくせに金持ち婆

あがつけられて、私がつけられないなんて、悔しいから。それに私、お年玉貯金するっての、嫌なの」

「将来苦勞するぞ」

「貯金くらい、ちゃんとしてるわよ。普段のお小遣い。日常生活の中で地道に積み重ねていくのが好きなの。その方が自分のお金って感じがするじゃない。お正月にどっともらったお金は、ばーっと使っちゃうの。その為に普段は欲しいもの我慢してるのよ」

正行は溜め息をついた。この子は、本当にわからない。妙に大人っぽかったり分別臭かったり……それなのに、少女というものを感じさせる何かは、今まで会った誰よりも多分に持っている。そして、彼女に興味を持ち始めている自分にも気付いていた。休憩がわりにこの子ともう少し話をしてみようか、と思ったりした。彼女も急いでいるわけではなさそうだ。

「このあたりの子じゃないね」

「このあたりよ。校章、ほら」

セーラー服の胸を突き出して、名札と校章を見せる。確かに、この近くの中学校のものだ。

「出身は違うだろ。言葉が違うで」

「うん。育ちは東京。生まれは青森。父親の転勤多くて。名古屋には、半年前に来たばかり。でも、名古屋弁も使えるよ。だって、学校では名古屋弁よく喋らんと、仲間はずれにされてまうもん。まだ慣れとらんで疲れるけどお。そのうち、自然に使えるようになるんじゃない？」

「名前も変わってるね」

「うん。うちの兄弟はね、国際人になるようになって、無国籍な名前、つけられてんの。私は亜蓮で

しよ。姉さん芽理^{めり}だし。兄さんは丈^{じょう}と蔵人^{くらひど}」

そう言つて、亜蓮はじつと正行の目を見つめた。彼女を口実にして、さぼっているという後めたさがないわけでもない彼としては、その見透かすような眼差しに、どきりとする。何か悪いことを見つけられたような気分になる。それにしても、この子の目は綺麗だ。

「お兄さんの目、綺麗」

いきなり言われて、正行は動揺した。

「な、何、何言つてんだよ……」

見苦しくうろたえる正行に、亜蓮は笑つて見せた。それは妖艶と形容できる、と正行は思った。

「だって綺麗なんだもん。私、お兄さん好きになっちゃった」

「大人をからかうなと、さっきから言つとるだろうが！」

「本気よ」

「それが、からかつとる」

「本当に好きよ」

「目の色だけで人がわかるか！」

正行は、いつの間にか亜蓮の言葉を本気にしてしまっていた。本気にするまいと思ひながら、すっかり彼女のペースに巻き込まれている。

「あら。目は、その人の性格を一番よく表してる所だと思うわ。わかるわよ。私、人を見る目はあのよ」

「どうしてわかるんだよ、そんなこと」

「自信があるの」

「まだ何も知らん年のくせして」

亜蓮は肩をすくめて、椅子に座り直した。

「そうみたい」

そこまであっさり言われると、今度は正行の方が落ち着かない。

「何だ、急にしおらしなって」

「だって、私がお兄さんのこと、いい人だと思ったのはね、だいたいの人が私に言うことを、言わなかったからよ。『生意気』っていうのが一番多いわね。それとか『気味が悪い』とか。最初から相手にしない人もいるわ。ガキのくせになって顔して、薄ら笑いなんて最低」

「誉めとらんわ」

全くだ。彼女は誉めてるつもりなのだろうが、中学生に対して同じレベルの反応しかしていないと言われているわけだ。面白からう筈がない。

「なのに、ちょっと今、ガキ扱いしたでしょ。ちょっとがっかり。ちょっとだけね」

おまえはがっかりかもしれないけど、俺は嬉しいよ、やっと同レベルから脱出してさ。正行は舌打ちしたい気分だ。それを全く無視して、亜蓮が正行の手首を握る。それを正行の目の前に掲げると、ゆっくりと自分のもう一方の手を近付けた。握り拳に、ピンと小指だけを立てている。二人の手を並べ、光に透かすように、じっと見つめた亜蓮の顔に、ぱあっと笑顔がひらいた。

それは、まさしく「ひらいた」のである。眉間に皺を寄せて、真剣な目をしていたのが、一瞬で変化した表情は、手品のように鮮やかだった。

「やっぱり見える。ほら、見えるでしょ、お兄さんにも」

その言葉を聞いて、正行は心の中でにやりとした。やっとこいつから一本とってやれるぞ。そして思い切り冷淡に言い放つ。

「見えせんわ、赤い糸みたい」

しゅんとするかと思いきや、肩をすくめて声をたてて笑う。

「無理しちゃってえ。見えてるんじゃない。何も見えないって言われたら、ああ見えてないんだな、と思うけど。ちゃんとわかってるんだもん、赤い糸なんだってことは。見えてるのに、わざと見えないって言うだけじゃない」

彼女は鞆を抱えて立ち上がった。

「私、お兄さんの恋人になってあげてもいいよ」

「馬鹿野郎、こっちがごめんだ」

「野郎じゃないわ。女だもん」

「ガキは野郎で結構だ。俺はロリコンじゃねえ」

「恋人いないんでしょ」

「余計なお世話だ」

亜蓮は、ふふん、と鼻で笑った。

「私、また来るわ。あの売り場にいるんでしょ」

「ああ、いるよ」

正行は嘘をついた。あと数日で研修を終えて会社の方へ戻ってしまうことになるのだが、そこま

で正直に言う必要はない。どうせ、こいつは来やしない。本当に来たところで、なんだ、いないのか、嘘つき。それだけで終わる筈だ。幾ら大人びていると言っても、十四歳なのである。すぐに忘れてしまうだろう。もう会うこともないだろう。

「ああ、ちょっと」

会うこともないと思ったから、出て行こうとする彼女を呼び止めた。最後に、ちょっと訊いておきたいことがあったのだ。大人気ないが、訊いておかないと、後悔しそうだった。

「どうして俺に、そう拘る？ つまらん男だぞ。からかうな。子供にまでそういう言われ方すると、面白い」

亜蓮は振り向いた。首を傾げて、じっと正行を見た。

「悲しいこと言わないでよ。お兄さんは、つまらない男なんかじゃないわ。理屈じゃないの。ピンと来たのよ。私のこと、わかってくれそうなんだって。愛されることの少ない娘はね、野性なのよ。生き残る為に、いろいろな能力が、そりゃあ発達してるわ。少しでも自分が安住できそうな人を嗅ぎあてることに関しちゃ、とっても敏感なの」

悲しいこと言わないで……そう言った彼女の目は、本当に悲しそうだった。正行は、つい、ずっとここにいるなんて嘘だよ、これがずっと勤める会社なんだ……そんなふうに言って、名刺を渡し、しまいそうにさえた。った。

「君が……安心できるってことは……俺は、そう言われて、少しは喜んでいいのか？」

なんとも間の抜けたことを尋ねてしまった。再び、亜蓮の上で笑顔がひらく。

「とっても。とっても喜んで」

そう言い残して、彼女は駆け去った。大きな声で歌を歌いながら。英語の歌なので、歌詞はわからなかった。国際人になるようにと育てられただけあって、発音は美しく、歌自体も上手いものだった。

そして彼女は、正行の奇妙な思い出になる筈だった。

「めーりーさん」

歌うように呼びかける。

「は・あ・い」

振り向く姉の長いストレートヘアが揺れた。亜蓮とは八つ違いの芽理。たいへんな美女だ。短大を卒業した後、大きな会社に就職し、一年後に名古屋に転勤になった。それに半年遅れて、父も名古屋に転勤が決まり、再び一家六人での生活が始まった。八つ違いということで、亜蓮が物心ついた頃には、姉はもうセーラー服を着ていた。高三の丈、高一の蔵人とは何度も喧嘩をしたが、この姉とはしたことがない。

「あらっ」

姉の唇が綻んだ。

「その口紅とマニキュア、いいわねえ。見せてごらん」

亜蓮は素直に近付き、姉の細く白い手に、幼さの残る……と言うか幼さそのものの、日焼けした手を載せる。

「亜蓮には、本当に赤が似合うわねえ。中学校の規則が厳しいのは残念だわ。セーラー服に、赤い